

随想



しらぬ火

西村 慈

この秋はふるさとに帰って二十余年振りに不知火を見た。

お盆に果さなかった両親の墓参をする為、不知火町の実家に出掛けた九月五日が、偶然にも不知火の夜だったからである。

高校生の娘を連れて夜九時頃妹達二人に迎えられた私は、恰度良い機会だから娘を龍燈場に案内して不知火を見せて呉れるように妹に頼んだ。

龍燈場というのは、実家から歩いて二十分位の所にある小高い丘で、此処は遠い昔の行幸に、不知火を見給うた景行天皇の古事を伝え、不知火海を見下す眺望の美しい所であり、私は度々この丘の草の夜露に足を濡らしながら、沖の不知火を見、歌を作り、初秋の一夜を明かした。

ものであった。

妹は私の依頼に答えて、この頃は近海の干拓のためにこの龍燈場からは全く不知火を見る事が出来なくなつたと言ひ、松合迄車でお供しようと言ふ事になつた。

二十数年前私の娘時代までは、松合へ行く不知火見物の客達の大方は、二里の海岸沿いの道を歩き、中でも、熊本から松橋駅に降り立った五高の学生達は、隊伍を組んで高い歯の下駄を鳴らし、寮歌を高らかに歌ひながら深夜の県道を行くのが毎年の慣しであった。

松合の丘の上は、戦後の観先ブームに乗って年と共に盛んになつた不知火見物の光景らしく、火の出を花火によつて観客に知らせ、無線の機械を据えたハムの仲間の声々が、丘にひしめき合う人々の声と交錯し、息詰るような雰囲気であつた。待望の不知火は一時半を過ぎて、遙か沖の方に見え初めたけれど、初めての観客はそれと確かに知る事が出来たであらうか。陸の物々しさに比べて、それは数も少く小さかつた。

父が達者だつた頃、友人S氏に誘われてこの海に夜釣に出掛けた事があつたが、父達のその夜の漁獲は皆無で、朝になつて父の持ち帰つた籠の底には何匹かのヒイカが貼り附いていた。然し父は漁の事よりその夜見た不知火の見事さを心から楽しそうに私に語つて聞かせたのであつた。

あの夜父の見た火は今私の見ている火に比べてずっと美しく素暗しかつたのではなからうか。この夜の不知火の光源となつている船の数や昼夜の気温の差、海水の温度等々について科学者らしく話し合つていられる観測班の先生方の声を聞きながら、私は遠い日の父の事を思い出していた。

若くして母を喪ひ、弟の急死に遭ひ、長い戦いの年月を送り、やがて父とも死別した私は、おそ播ながら母となり得ていまは伸び伸びと生立つた子を伴つていたのである。

二十年経て不知火を見る吾は乙女となりし子を伴へり
こんな感懐に浸っている私の側に立つて終始黙々と沖の方を眺めている娘はどんな感懐を持つていたのであろうか。
不知火の火の赤いまたたきの列の右手に見える遠い灯は戸馳あたりか、熊大観測船の深紅の灯が一際鮮やかに輝き、わが八代の街と思う辺りは暗い海面より更に暗く深い洞窟の様な闇に洗んでいた。私は、

解明を遂げし神秘と伝ふともむかしながらに不知火は燃ゆ
と歌つたけれど、文明の波に押しつけられて段々貧しくなつてゆくのではないかと思はれる沖の不知火を泌々と眺めずには居られなかつた。
(歌人)

かしいものである。
日本のしかも熊本という地方に居つて日本の立場について、話を聞き本を読んで、それなりに理解しているつもりであつた。

ところが、自動車業界の勉強ではあつたが、外国を直接に見て歩き、島国日本の持つ特殊性を肌で感じた。
資本主義とアメリカの企業を廻る中に、うなづいた事も、資本主義と社会主義の谷間で起る混乱をもて余している日本の位置が判然としたことも、高い外貨を使った代償だと思ふ。

広漠たる大陸に自由に広い街づくりが行われ、開拓の余地が大きく残された資源、国の豊かさは、とても日本と比較対照にはなるまい。自動車産業にしても、日本の狭さと貧乏という条件の中で、どうやってアメリカ流をとり入れるのだろうか。労務問題、企業合理化の諸問題についても、アチラ式の技術が学者の手で紹介されているが、アチラ式の背景を良く知り、その必然性を納得した上で、日本の修正をされるべきではなからうか。

組織論一つにしても、アチラ式の間質や社会背景を日本流に置き換えてみれば、絵に書いた餅のようなものも随分とあるのではないか。
井の中の蛙で、島国に閉じこもることの非は云う迄もない。自由諸国や共産圏のものを大いに導入して、日本は発展しなければならぬが、それと背中合わせ

に卓越した鑑識眼と修正技術は欠くべからざるものだ。
自分の好きな側の国のものを盲目的に礼讃する人がすくないのも困つた事実だ。
アメリカ人は誇りを持っていた。一見して自由奔放に見える国民が、自国の作り上げに持ち前の開拓精神で、一人一人が関心を持ち努力している態度は、確かに尊敬すべき点だと思ふ。
どこに行つても、州旗と国旗があり、その広さと豊かな国造りを誇示している。私の国日本はどうであらうか……と渡米旅行者は例外なく考えるという。
目の前のどんな小さな仕事であつても、豊かな国造りに直結していることを私達の一人一人が関心を持ち、努力する時日本の国力増進のロケットは軌道にのるのではなからうか。
オリンピックで国力、つまり経済力の格差を感じた人も少くなからうが、私達はおもつと自分の国を愛し、豊かな国造りを真面目に考えるべきであらう。
愛国心を戦争と関連づける等愚の骨頂である。

このところ、若人達にも国を愛する信念が芽生えてきているような気がして、大いに胸ふくらむ思いである。
(会社常務)

維新と、福祉と、肥後と

福田 令寿

明治維新は史上の壯観。皇政復故の一事で維新の名に耻じないが、まだその奥もある。何がこの偉業を成さしめたか。固より天の時、地の利。そして人物輩出という一大要素がその上に加わつたから。特に明治天皇の偉大さは又格別。

さて、明治天皇をして古今の明君たらしめた力はと問えば、それは亦人物だ。
(一)「明治第一の功臣」と副島種臣が銘を打つた元田永孚の献身的補佐。

(二)「胸は五大洲を呑む」と勝海舟を驚かした横井小楠の識見の介添。これ等は忘るることを許されまい。永孚も小楠も共に「肥後っ子」であつた。これら肥後っ子が翼賛大成した明治大政のキーノートはと問えば私は天皇の御歌
罪あらば 我をとがめよ 天つ神
民はわが身の産みし子なれば
の一首が、之に答えて余ありと信ずる。

これは単に治者被治者の関係ではない、子を懐く親心の号泣である。ただこの心術、之が社会事業の生命ではあるまいか。
思うに、明治の維新は、深く源をこの

親心に発し、その流れは政治を超越して進み、前途には目にこそ見えぬ、幻が立つた、曰く「福祉国家」。背後からは純真そのものの肥後魂が推進した。斯くて維新と、福祉と、肥後とが絶妙な三題語を構成した。

小楠は明治二年正月、年長参事として(謂わば総理大臣格で)参内し、君臣水魚の親しみを加えて退廷。その帰途の途上刺客の刃に斃れた。しかし、その時既に中央に於ける維新は、よくその緒に着いていた。ただ、小楠、永孚の郷里肥後では翌三年やつと御一新の幕があいた。昨日までの藩主細川韶邦公は知藩事となり、間もなく退職。二代目の知事護久公、三年七月庶民の代表を熊本城に集め次の布告を宣言された(布告の一通を私は秘蔵中)。

村々小前共に

今度我等知藩事の重任を蒙候ニ付而者、朝廷之御趣意を奉じ、……管内の四民うへ(飢)こぶえのうれへ(憂)なく各其(の)処を得せしめむ事を希ふ。中にも百姓は暑寒風雨もいと(厭)はず骨折て、貢を納め夫役をつとめ、老人子供病者にさへ暖に着せ、こゝろよく養ふことを得ざるは、全く年貢夫役のからき故なりと我ふかく恥おそる(筆者申す。昨日まで神格の殿様が農民の前に頭を垂れ、謝罪してござる。何とかにもして此(の)くるしみをとか

愛国心

金津 通夫

客観的にもを眺めるということとは難